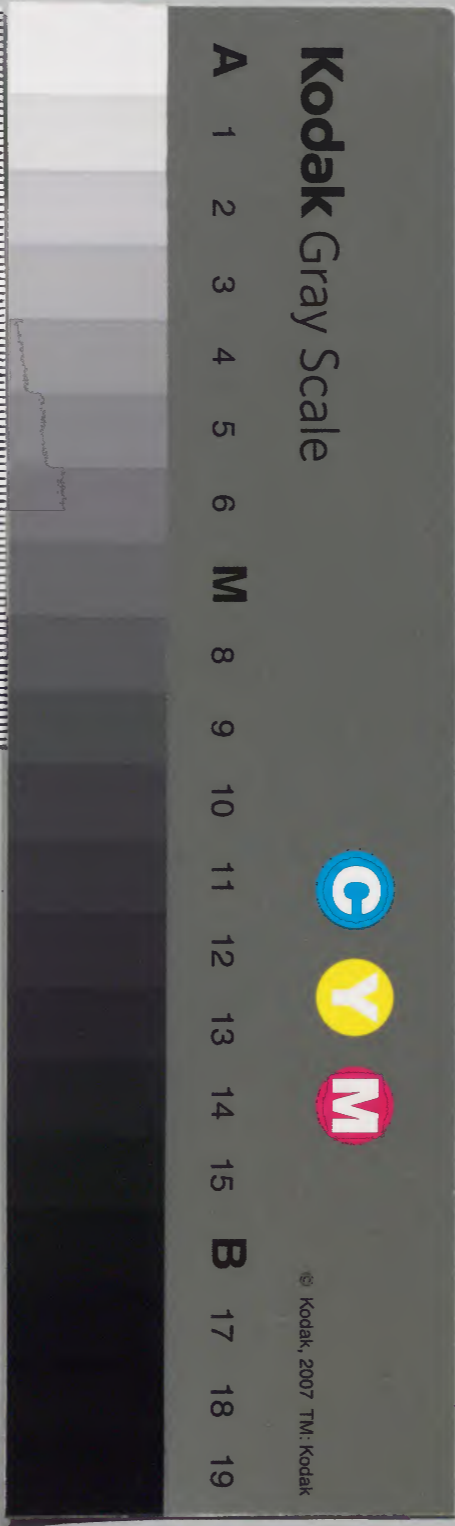


田村 兼平 美盛 六

和書門類  
 二七九一六號  
 八七函  
 一三架  
 三册

内閣文庫  
 番號 和 27916  
 冊數 30 ( 6 )  
 函號 199 189













いづれも向ふ城より城への橋乃花登<sup>上</sup>  
史記乃名所多といふも此寺の地を乃橋  
小志くつ所されたりや大慈大悲の喜れ花  
十悪れ里小芳く二十身の杖れ月入溜の  
水乃新清一<sup>ギヤ</sup>子早振神のお前乃香られ  
や<sup>ト</sup>や<sup>ト</sup>や<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>れ<sup>ト</sup>香<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>後<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>埋<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>そ<sup>ト</sup>く<sup>ト</sup>い<sup>ト</sup>は<sup>ト</sup>橋  
の<sup>ト</sup>相<sup>ト</sup>ど<sup>ト</sup>し<sup>ト</sup>見<sup>ト</sup>後<sup>ト</sup>し<sup>ト</sup>八<sup>ト</sup>重<sup>ト</sup>一<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>實<sup>ト</sup>九<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>れ<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>の

いづれも向ふ城より城への橋乃花登<sup>上</sup>  
史記乃名所多といふも此寺の地を乃橋  
小志くつ所されたりや大慈大悲の喜れ花  
十悪れ里小芳く二十身の杖れ月入溜の  
水乃新清一<sup>ギヤ</sup>子早振神のお前乃香られ  
や<sup>ト</sup>や<sup>ト</sup>や<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>れ<sup>ト</sup>香<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>後<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>埋<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>そ<sup>ト</sup>く<sup>ト</sup>い<sup>ト</sup>は<sup>ト</sup>橋  
の<sup>ト</sup>相<sup>ト</sup>ど<sup>ト</sup>し<sup>ト</sup>見<sup>ト</sup>後<sup>ト</sup>し<sup>ト</sup>八<sup>ト</sup>重<sup>ト</sup>一<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>實<sup>ト</sup>九<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>れ<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>の  
いづれも向ふ城より城への橋乃花登<sup>上</sup>  
史記乃名所多といふも此寺の地を乃橋  
小志くつ所されたりや大慈大悲の喜れ花  
十悪れ里小芳く二十身の杖れ月入溜の  
水乃新清一<sup>ギヤ</sup>子早振神のお前乃香られ  
や<sup>ト</sup>や<sup>ト</sup>や<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>れ<sup>ト</sup>香<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>後<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>埋<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>そ<sup>ト</sup>く<sup>ト</sup>い<sup>ト</sup>は<sup>ト</sup>橋  
の<sup>ト</sup>相<sup>ト</sup>ど<sup>ト</sup>し<sup>ト</sup>見<sup>ト</sup>後<sup>ト</sup>し<sup>ト</sup>八<sup>ト</sup>重<sup>ト</sup>一<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>實<sup>ト</sup>九<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>れ<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>の

田村







東より行きてぬむ世に等しき徳ありて  
坂上の田村丸則伽藍建立して千手此佛  
像と造りて都鄙安んずるを名を細心  
行敷居をいひて親善産地乃清再徳  
又且好と約するは是坂のこれ田村丸今  
も其名を流する清ありて清海を名に教  
くよ千手の清ありて清海を名に教

國を万民より清の大地の親なりて  
實や安樂世界より今世清海ありて  
しと我ふが為の親世も思成へやく  
清海唐の清ありて清海ありて清海  
名所をいひて清の清ありて清海ありて  
清海ありて清海ありて清海ありて  
清海ありて清海ありて清海ありて  
清海ありて清海ありて清海ありて

日寸



阿比の清閑寺歌に中山今徳中と云  
 らく見えてい 又是より少あつては  
 増波女れみえくるいづれもやん 阿れ  
 へよぬ鶴尾のちを先づ免せよまねの  
 山乃巖らも出る月乃輝てはまはれ  
 梅の氣色ぞくはあをば後しまらぬ  
 雲の是をばいづれもさくはるる

一時 冥情い魚一 情い魚一  
 長宵一刻をい金 長清書月経  
 冥い金もかへと今世対や 月 魚一  
 面白れ地まのたやいあさくは来のるよ  
 毛る月乃香もゆる夜あつてはまはれ  
 つまそ女やんねん人 嘆きあやあぬ  
 雲乃まをのる乃を冥時先なる経書



陽乃紅縁そ風長穿るる喜相の滝れ白糸  
けりあやみても面白くもかたじけなく  
懋志志のまもりなり 唯頼め志り  
系れを系 我世中はわん限る法  
松葉酒と物と清水の相率もさや喜柳  
此実の枯るは本成とも喜柳木の松の化  
く乃喜もかたじけなく長穿るる喜相の

天も花は碎るや面白のまかちあ面白  
のまかち 實や氣色ともかたじけなく  
ぬ松の具名いさる人 喜いさ  
やまの名も白若れはとあまは喜相  
と見え 悔るやいけと何からたまらう  
程り遠近乃 喜もあまは喜相  
見事なり 思ひ給る我のあてんや



上  
地を控況の清前よりカるかと思へり  
上  
くざりいせそ坂とれ田村堂の朝りや月乃  
上  
ひと戸と胡のめく肉よ入せあひかり肉陣よせ  
下  
あひかり中入狂言語 取身すくくらうや極多の朝  
少病てチくさりあるる法のる迷りぬ月  
の取をまよ彼法経と讀誦する此法経と  
讀誦するチわく面白のおくもや地を

権理乃れはづり法を奪れ滝は彼海と一  
河の流と汲で地生れ縁も縁人よ詞とらる  
取がれ讀誦をど則大慈大悲の親も慈  
護乃ち甚る好りチあまの老よ  
うはあひく甚るきうさ男新乃甲冑と  
帯しみえまやういふ好る人そ海まほそ  
是へ人望也十一代平城天皇乃法字ふら

田寸







伴勢路の山道く  
弓馬の乃もさたつらん  
とりのけをさるる梅枝れ花も紅葉の色  
のさへ極んちあつる縁意もあも我  
大君乃神坐元業親喜れは抑も仏力と  
云神カも極救く小まほつとらまふと云  
て小男座の流麻れ清後や伏も思ひ  
嘉例とらるる 去程よ山河と動も鬼神の

智天よひさ地よみらそ万本も草物揺せり  
いふ鬼神もゆらに聞ん 千方といひ  
逆居も仕へ鬼も王位と後天罰もあ  
らさともほまはむさひ失いぞう増てや  
ゆらうる流麻山 振るもえんは伴勢の  
海く安濃乃松束じり立来て鬼神へ  
黒雲鉄火とゆらけ教子誘ふ身成







八海

是八都方より出する所を以て我東西國

と見よる程よ此夜思ひて西國海行と

志ひ 春能浮之浪乃沖津海チ

入日始雲の照るひに地影さるる程

程チよチ程チ成し毎海毎く八海の浦よ志

小なりく弓チ面白月海よ浮入てい波

八海



津波火の似り 漢籍秋西岸の傍て  
宿の 暁潮あそ波て楚竹と楚竹も今も  
志もく 蕪火の船のうえ船の面白  
月出の沖津波 船乃小船あがれ  
素く 海士の竹船里道く 一葉百  
里の紅乃の唯一帆れ風乃の  
それ雲も浪 月の紅乃のうらうら

船乃浮小素京乃浪と縁り小うの海ひく  
海岸をそを志ぬ日の筑紫れ海も續  
らん 亥ハ八海の浦はる海士の船船も  
船小舟釣の暇も波乃く 船渡り津竹  
や 船乃小船れ海のくもみえそ残夕雲浦  
風乃の長遠るが喜やあふとさあらん  
喜やらんをさあらん いふは海屋れ月



八海  
一葉用中  
誰そ後ひそ 行書

懐行者そてい一板の富成法借紙

是より約ひ其由ありふ中よりいふやん

懐り者の後ひら一板乃お宿と作れ

紙より見苦後法成乃用そてい程よお宿の

叶ふまゝい中と中な 其の中そてい見苦

後法成の内そてい程よお宿の叶ふまゝい

中と作れ 是の部すれ者そていいげ

浦始て一見の者そていひふ一板とそて

作れ お宿の部の人そ作らひふ一

板とそて作れ 何とお宿の部乃人と

いもまゝく固し痛りやけらうのお宿そて

中とそて 元来板も何乃屋の 唯葉

板とそていめせ 紙も今昔の思もそ







志意よ東下緝の法志背證婦人むら鞠  
るふは川立あがり一院の清俊源氏の犬お  
檢非遠使又位の尉ふゆをもの義經と名乗  
あひ清骨極天晴大おちとんる今  
やう小思へ出らまそい 其時平家殺れお  
よもも洞戦事終共船一被清をそ波打  
際よあり立て陸の敵と結然ふ 源氏

の方よも續兵又十騎をうり仲ふもそよの  
やの字ゆとり名乗て志先然そみそ取よ  
平家乃方よも悪七を清家清と名乗そ  
のやと目が事戦ふ 其時よのやハ志  
カおちろく力ぬがけよ引退ふ 系屋  
追懸えよのやハ 志をうらぬとの鞠とん  
くんで 後引はそよのやハ 其時よのや



まんと並行 星よ急いやく 引か  
神付れ板より 引らるるたたく瀬を  
ゆふふは 是と流流 多義経は馬と  
汀よ折よせまむ 作飯次信能登殿乃矣  
先よか引く馬より 志をふさうとおほせ  
くねよの業主も うしきまをいさふありしと  
是くくはり 船を沖へ 陸へ海へ 相引よ引

浪の初と鯨波 終く破乃波雲風をうりの  
喜き引くう威よまふ 本日 ぬきおりのま  
警人よ 船乗物 浩との名と名乗るま  
我名と何と夕波の引や 秋浪も物合を  
本れ九殿よ あくしあをり 業とせもゆ  
海よ 同日 実や詞と 雲うふその名 麻よき  
老人の 二六 昔とくは 小名夜 同日 けを







判官少く海まはる 我義經の遊具

成り願志よひうね あれ小くは西海

乃波よきよひ生れ乃海に沈みせり

愚かふらう志いさしは海とて思ふ

如の月乃 志れ夜るれと墨形さ人も

すめふ今宵の志 若と公ふ思ひ若

仁と徳よの合戦志道 祈るる

志もえぬ 氏土此年海より柳

のくらの月乃又ふら慕れ乃ハ

遠ぬよ遠くをさや生れ乃海山とて思

やせ海に八傳の志免とふかよ海

志強の志れ少れ世よ友相志也

志もぬおと高深の志郷よ志て久しき

年乃志の志れ友志よ志ひ志て能く



八

乃ち名取也

思ひ出さるる

月のみ有るなり

日の諸は愛らし

源平の事と夫とと探船と組約と

多うらひれおしむおきよらり

ひさて責致ふ 其時何とら志らる

義経らと取落し彼よゆりえ流し

其折しむひく治しそ遠よを

敵よりとそりしと義経射と遊せ

船ちく成しやよ 敵は是と名り

船とせ能くふもて既あやう

其時 其時能く切拂

と取らるるの諸よおあり

魚房中松は川の西振舞

其時 其時 其時

八

九







と... 筆の... 成...  
... 波... 夫... 教...

... 敵... 何... 教...  
... 波... 楢... 月...

... 船... 波... 楢... 月...  
... 船... 波... 楢... 月...  
... 船... 波... 楢... 月...



服

是の荒業より出まら侍そは我未却  
 と身はの程よは善思ひを却(とらひ  
 縁心荒業乃海の船かそくハる  
 治治とそそとそ然るれ雲乃波がらも  
 みる相承の里乃名同を決すの浦生田  
 此門はまゝよりくさるの行よ是の津生

長



田の川とる中へ又是成林乃末を解れ申  
猶色色うはくを作行よ立寄御くやと  
思ひい 八十年乃矢の生田川流年の  
なり生田川流てくやと月日うぬ  
飛雲居葉の子あり又き後不滅乃葉  
と行一色一書れえんやうい空此中道の  
眼と魚とてあしくあえんやうれ観念

於心即りくくあき定ぬの身とあふ  
入るもなれ轉復らあんちの肉と解きて  
同浮よくるあ執意く 其生記の海  
るれや生田川志哉代まて復れらまふ  
迷ふ人より迷ふ身れ行末定まるとも  
流るる愛のまらまらゆらん愛れまらゆらん  
くふ是成人よりゆかす事のいごさるらま

巻







ち名つらくはく名と揚をりふ依く系  
 季之のけ花とれし則八幡殿感れ神  
 本と致せしり心来名おのちたるるれ  
 ことと服乃毒と也 扱い名おれた  
 位と名はと名張をせぬ年とれ  
 位と名はと名張をせぬ年とれ  
 其系季の感也 扱い名おれた

弓 服の扱乃 今もても 名と也  
 一何ういふる系季のく末の世  
 生田の乃身と控く社名い久しれ氏古の  
 屋とあふのまふしくら管の名とち妙  
 されやく 扱も年おれ去年扱乃の  
 定と彼中のあ橋二十夜の合戦と討  
 勝つて山陽乃南あ乃人そ十回と圍乃兵



朝合十万余騎津比治一の舌を籠り  
東は生田の表西は二れ舌とくまの  
三里の程を満くまの浦とくまの  
船とくまの陸とくまの旗い  
風よあひま天よ籠分野糧火  
たいつく右の明石のどよりか  
まのさるり 煮くまの城を  
たいつく右の明石のどよりか

の友録乃中も新也 時二月上旬

乃中れ事新也と決す乃着果れ  
海と嘆く乃為智のさえ乃波  
生田れおの乃と登とくまの  
枝一花開く乃天下の喜と軍  
と新ふ心乃花乃候乃ぬ  
六万の騎と二のふ乃もて



追子搦子の浦山無く次乃浦字と  
かとみく押るる 奥麟鶴野もかく  
まうり<sup>日</sup>後の山松よ野わら残るもれ白州  
まゆく<sup>と</sup>とき<sup>し</sup>ま<sup>り</sup>た<sup>る</sup>鶴<sup>と</sup>は<sup>は</sup>ぬ<sup>り</sup>  
そ<sup>も</sup>も<sup>と</sup>さ<sup>ら</sup>ふ<sup>ま</sup>き<sup>く</sup>く<sup>と</sup>野<sup>一</sup>浦<sup>一</sup>と<sup>は</sup>海<sup>人</sup>  
根く<sup>よ</sup>漢<sup>史</sup>の<sup>形</sup>形<sup>教</sup>を<sup>え</sup>て<sup>漢</sup>禁<sup>火</sup>も  
く<sup>も</sup>後<sup>よ</sup>を<sup>尾</sup>の<sup>波</sup>も<sup>須</sup>之<sup>の</sup>浦<sup>も</sup>も<sup>山</sup>  
も<sup>漕</sup>よ<sup>る</sup>兵<sup>船</sup>と<sup>は</sup>り<sup>く</sup>海<sup>士</sup>の<sup>と</sup>を

船もか<sup>る</sup>ん<sup>と</sup>や<sup>り</sup>と<sup>志</sup>梅<sup>乃</sup>花  
月<sup>よ</sup>成<sup>り</sup>夜<sup>枕</sup>ひ<sup>と</sup>夜<sup>の</sup>宿<sup>と</sup>う<sup>ま</sup>  
然<sup>の</sup>宿<sup>り</sup>も<sup>白</sup>名<sup>れ</sup>茶<sup>の</sup>あ<sup>る</sup>と<sup>是</sup>の<sup>あ</sup>  
さ<sup>は</sup>下<sup>舟</sup>と<sup>結</sup>ま<sup>り</sup>茶<sup>れ</sup>あ<sup>る</sup>と<sup>お</sup>り<sup>ま</sup>い  
湯<sup>身</sup>い<sup>る</sup>る<sup>人</sup>人<sup>と</sup>人<sup>と</sup>今<sup>も</sup>何<sup>と</sup>う<sup>に</sup>は  
へ<sup>き</sup>我<sup>ら</sup>は<sup>世</sup>に<sup>お</sup>り<sup>ま</sup>す<sup>の</sup> 何<sup>と</sup>う<sup>に</sup>は

籠



夕景の 其糸より遊是也 湯乃他生  
の縁もそ一樹の陰をこれ縁に宿る宿梅  
れ本乃本に宿るを我の又世と号乃縁  
らいつむるを共少なりけさしをそ共  
少なり 鳥羽玉の敷乃衣と号にほく  
文乃修し生田の水も沈夜なる本  
後乃少なりた乃本後乃少なり 魄

ち陽よ故魂の縁に宿る魄に都来乃魄  
罪の一もまゝ生田乃名所あよ血の縁原の  
川をわたり 紅波の楳と流し流 白髪骨  
と碑致し 月も日ももふとら頼るや  
長秋の啼くと眼もくくみんも形を體性  
乃乃くくもい免せよ 婦さきわか  
まほいまさあ氏者のちまくの糸梅玉の

藤



枝とて海も通くと見えまわらぬ人  
あゝ海も通と 今い何とけいじつ  
も源を系季代生の縁乃一樹れ  
中の菊面白顔と花と湯身貴人  
法味とえんと 醜具の魂よりけり  
ねとひまといえんとすまはをわらう  
糸絢羅の志人おれ敵乃夷あも見え

赤智 雲く見れおと海や叙と  
海も通と 雲よ書て地と物 山と  
表物 海も通 雷火もみされ 西風の  
紅煙乃旗とるひうく多圖海より生田  
川れ波ときてあとう一山里海川も  
絢羅乃のちまて成ぬおとい系後まわ  
替くんと結とまれく 海は生田成り

旅



時も昔れ毒の梅乃を盛也び枝も折  
て服よせ元來難く若民者よひ  
あふあ来乃さうけうからさの服乃を折も  
源吉も我さうさうりんさくもじよのん乃  
花も梅もあふりく面白也敵れ其是と  
そそ大暗敵よのん明とそ八騎中取  
難くゆきん 甲も折れられて 大臺の

海もぬ 節考之跡よ後と合 向  
あとし 洋舟 又りりあし車  
輪も折れハ十字字らりく花の秘  
術とそとみえけうらよ友先と志  
くそ折りのさそはきまそ也危難人よ暇  
中そ花の根よ毒ハ右果よくそ友乃毒ハ  
右果小くも也結くしそまひ















又天香山と号し震旦の口めり洞と号  
 せり傳教大師桓武天皇と清獻とに  
 川ありて延暦年中の西京創我立祀堂  
 誦し多し根中堂此山とまて張らる  
 みまきい 極く大ま権現のかりま  
 波心と濃とわんもおの坂なれ内いり  
 南に林藤が木深と表乃うらうせ大ま

権現の湯を伝ふりとのありて入り  
 けりや一切気生悉く仏性如來と  
 中時と我う身をも輕母志うと世に  
 信のしく仏氣生色とら身也お僧も我も  
 満いあり一仏衆乃 峯のい合乃指  
 と双へ 林藤よ止観の海成を  
 又戒定惠乃三學とを 三塔と名付







碎帯と眼晴と破り紅波指と流と靴  
籠と残巻ととまの  
東の松陰よ  
修石のちまこ  
津の東は草花よ甲冑と帯と  
いふわりの人を海にまかせ  
てわが津力見と東のよも我は世はととる

よの津巻とそはらとらや魚平見とと糸  
より  
わさくもねの巻ととるん  
夏のこと見よ  
物倍も  
見よ  
人よ



...を姑らに慰むる人ともえはるる極の  
 ...乃に人の ... 船人はあはれ ... 漢史も  
 ... あはぬ ... 武士の夫也の浦に渡りて  
 ... と見えし我をう回しは身と法乃に  
 ... 多しゆゆて我と又彼等よ渡りてをりて  
 ... まるを ... 史をぬき死の政来てを事  
 ... 子に死がらむ ... 前後不同爰幻泡影といふ

... 唯乞撰花一日れ景 ... 弓馬  
 ... 此がよは月の鏡に残は無志七騎とあり  
 ... て本島殿の法道に治りて ... 兼平  
 ... 皆田より集令 ... 又二百餘騎ありぬ  
 ... 其後合戦夜くそ ... 徒二騎ふらね  
 ... 今ふ力おれ松東よあり ... 法腹められ  
 ... 作て通平す ... せしん御く ...



二騎粟津の妻原とてありまふ

<sup>下曲</sup> 通平中興後法敵大替と遊然

より防交はつんとその約の目録と互を

義仲法復らるれにおひれ敵と道も

汝一新よあゝもの所はありけるあそ

て同返りまゝ通平又中作こは信さ

復る流石義仲の人よ東かゝる人事

未代志法死辱きし法自害あるゆゑ分

井も好くあんと通平よいあゝま又行

たしあま 法は睦月乃未法

<sup>同</sup> 喜めさねるゝとえり法敵乃や凡の

書新をいられしりあややあ路のま

白雲れ所氷凍田馬とくあお

を阿ゝとあゝゆぬ望月乃約のうら



色見えのあやまち何れ人なれ果るの  
りゆくあはれそは後自害せむわんが  
よよと然るひかきても愚平の向後い  
かゝ遠方の泣と見返して 津くより  
朱見ん 人を表ははらけ夫ひの事  
てら甲ふかろことい海痛もく海まを  
しぞ海りのわくと馬とより遠近のまを成

取の愛う我りのまを君れ海泣と先吊く  
まひまゝ 実痛りま物語愚平乃  
海泣ぬ何とく形くせ平まひあふ  
愚平のくせも志そて戦ふ其隙少を  
はる期のは事とらよかく海牛也 柁  
之後よ思らぬも敵入る不都りま  
本方殿討まひぬ 日よりの海おると同

藤平







寶貞盛

支那方面十可儀去遠く生る道なり

爰も己分の跡地此國 貴賤群集の

穉名乃斂 日く執る乃法の場

實を殊よ攝取不捨の 誓言に依り

跡の趣き 独り成佛の法名を尋えん

各師の法の場知もあらずをそとるるに誓



の細よりう癒きむ知人ともあはれ人を  
さても彼國へ約法をみうふも安き  
たつらやうく婦も安き道ゆらや

半欲をよきあう孤をれ上を衆牙速  
とあぬ乃前何きうとやうふと大業  
まの立てぬいふ人と月中の梅名とんや  
近付るいり存種乃名よ公の智入同ん公

さうゆさきふ立花若き老乃彼のあしほ  
くもい種象の場よ金伝形もや種安せん  
一急梅名乃若名肉うい折取の老病果  
福とも毛眼の毎路たのそとらりく  
さのそ急うんとも安きとさる津遠う分き  
や南堂の法陀佛 いくふ静 一と清茶  
うん 梅とさげ月沖れ梅名よ一月と



鳥の半形しづれと志の人と見らるる不  
の發成余人乃らるる形誰よ白ひく何  
幸と申ねと皆人不紊しあつてさふ  
海の名残多き人しは思ひた成  
作らぬ元来は方へあまるとる鄙人なる  
人うまう名りたつても名余をもせぬ  
と人のけ下向則は院の素速ねたが

そ長生して世縁あの時ふねる事  
龜の浮本傳りた乃らふ結るる  
んちして老の幸方よあえほひり  
後よあまらざれはは身形る安樂園  
生るることせむ此の歎をとりまふ  
安枕の圃は名あ成又改めて名の  
に携うしそ人

美く存り中











らーあつねよおとせくろも初うとてげ  
あをそらちるてけうとみまの志れりの  
池の色つるそ安たまわうとて成て失り  
うりまわうとわりて失ふきり

長上  
藤原の池まゝりり法のまゝく海を  
影む梅名れあすまわうあひれあせ  
月後あよるをいも西へ月月の光とあふ

星りあさ輝くと形して終軟南共のほ  
佛南共のほほ南共のほほ南共のほほ  
ほほほ 極樂世界よ入ぬまのま  
苦海と幾つと梅色のあふ隔るれ秋を  
乃んいくはくそ所と不返の命あき  
壽仏とあふあふあふあふあふあふあふ  
あふあ 念々毎小僧生ん 南共



と云ふ 則ち改む

ついでと云ふ

其の終は俄と云てのあり

うへりりり 有りくや 姉き

あふあふあひら池の面よ見れはまつ

着成る甲冑成帯し来り 理本

乃人志をぬると沈めたるの沈れしは

きく修羅の苦患乃救くとうてき

もせ人とも 是れよまのあつり成する

言葉と解人ハさう小見も圓とせ

唯一人のさゆふ 是れや海も残の

言れ 賢賢白く老武者形と

其出まはくねやうる 是れはしは

月のえ 灯の影 照るぬ秋の端

のあふまよく 菊黄白れ霞きて令けり







光感し其奇異の曲者とらんて首取あ  
ひ大將とみまへ續勢りけり又兼武志  
かと思入る神の虫垂と書さうあはせく  
とせしきとと終よ鳥のしんぞうは味奈  
はくしひりしかりせハ本當殿を晴夜井の  
東殿別あしやんやん支那共義仲の  
と野みり見りし時發災の事さうなりし

今と定て白髪さうふゆさうよ思きさうて不實  
たは是極にたん次屏ハ見知さるらんよて正  
しん極に糸糸一目らん後とけりくお  
うひてあね女えんやん是ハ秋夜ふあはく  
ひひるを實感さるふしハ六十ふりま  
く軍せし若殿りしよ年ハ先とくあ人も長  
あね又も武者とて人ふあはけしきん

光感







実感

沙傾子付くまゝく武蔵乃長井子居候結  
 りひまびた度小あよれ下アていり定て討  
 死は久しむ後の思ひ出是まのこしは免  
 あまこと居りく赤地若預れひう身そ  
 いありぬ  
 然るに古歌もも紅きあそ  
 分ける初ハ端きてあよゆりし人を見あふん  
 漬しをい本文のあつるりうんて性た乃

朱實臣ハ端の殺と云れ少は驚し今れ実  
 盛と名を小園中ちまこふ上隠せぬり  
 弓取の名を末代するゆき月乃殺すも懺  
 悔そのうり中えん 其や懺悔乃おぼ  
 ん乃あれ意清く濁りて残し終ふ好  
 其れらの修羅の業せりくて又安ふ本  
 常と終んとまきうとごい悔めは隔れ



其の意を今にありて  
續兵との往くも  
其の中にもいふも  
手塚に在る所  
扇等のうらむと  
付て  
感と  
おのれ  
組  
て  
其の意を今にありて  
續兵との往くも  
其の中にもいふも  
手塚に在る所  
扇等のうらむと  
付て  
感と  
おのれ  
組  
て

軍指をききみ揚く二刀を  
其の意を今にありて  
續兵との往くも  
其の中にもいふも  
手塚に在る所  
扇等のうらむと  
付て  
感と  
おのれ  
組  
て

其意

十一



丁亥八月



下掛謠本者寶永之初上梓以來雖頒行  
於世其誤不少欲攷正之不得正本久而  
不測羅明和之災梓乃灰燼今也幸得專  
門之佳本悉加攷正再命剞劂庶幾廣之  
萬世云

安永五丙申歲

東都書林

日本橋新右衛門町

日本橋通壹丁目

戶倉屋喜兵衛

須原屋茂兵衛



